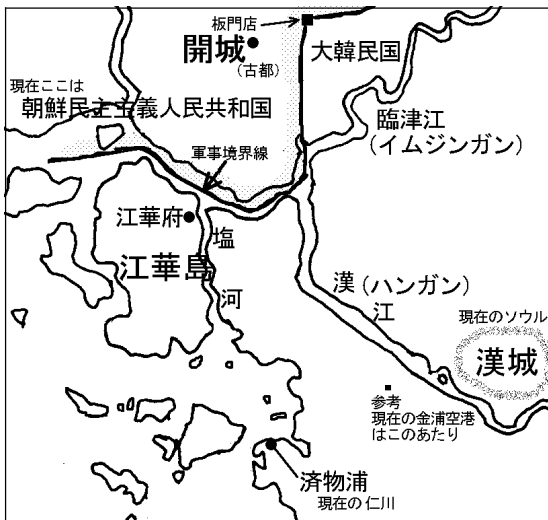


## 明と周縁諸国 14～15世紀

明を中心とする国際秩序の下で、明の対外政策消極化（1433年頃から）によって、15世紀には、アジア海域の各地に、明の産物を入手するための中継ぎ貿易拠点が繁栄した。

- 1) 沖縄では、**中山王** ちゅうざんおう 尚氏が中山・南山・北山の3国を15世紀初期に統一、【1: 】が成立した。**琉球王国は明の冊封を受け、朝貢した。**王城首里城とその外港那覇港は明と東南アジア、日本、朝鮮を結ぶ交易センターとして繁栄し、琉球王朝は東南アジアや日本の産物を自国の朝貢品として明に進貢した。  
1609年、薩摩軍の侵攻を受け、薩摩藩に支配され日本の封建国家体制に組み込まれたが、中国（明→清）との冊封関係は維持された。明治維新後、1879年、明治政府は軍隊・警察を動員して王国を廃止し、沖縄県設置を強行した（琉球処分）。
- 2) 【2: 】（14世紀末～1511）は、鄭和の大船団の根拠地の一つだった。明の力を後ろ盾に、マジャパヒト王国、アユタヤ朝の圧力を排除して交易を行い、東南アジア最大の貿易拠点に成長し、さかんに**明に朝貢した。**明の対外政策消極化（1433）以降は、インドの商人に【3: 】を売り、インド商人から【4: 】を入手し更に急成長した。マラッカ王国の支配者は15世紀半ばに**イスラーム教**に改宗、マラッカ王国の商業ネットワークに沿って島嶼部は徐々にイスラーム化され、マジャパヒト王国は滅亡した。今日ではヒンドゥー教はバリ島に残るのみとなったが、島嶼部のイスラームは、土着の慣習（アダット）を守り、またヒンドゥー的要素を持っている。
- 3) 1259年の降伏以降モンゴルに服属してきた高麗は、明の成立（1368）直後、明の冊封を受けた。しかし、高麗はモンゴル支配による打撃から立ち直れず、前期倭寇の侵入もあって衰退した。



倭寇鎮圧に功績のあった高麗の武将【5: 】リセいけい位 1392-98 が1392年、高麗を滅ぼして**新国家**を建て国号を**朝鮮**とした。これを【6: 】1392-1910 と呼ぶ。単に「朝鮮の王朝」という意味ではない。日本と中華人民共和国の学会では李氏朝鮮とも呼ぶことがあるが、この呼称は大韓民国では嫌われている。20世紀はじめ、わが国の侵略で消滅する朝鮮最後の王朝である。首都は【7: 】（現在のソウル）。なお、高麗時代の首都は**開城**（ケソン）であるので注意しよう。左図参照。

わが国では東京・京都間を移動するには新幹線が必要だ。ソウルの市民にとって、バスで充分行けるほど近い古都開城は、軍事境界線に阻まれ政治的にはとても遠い。開城工業地区には韓国企業も進出している（2016年2月撤収）が、一般市民が観光で行ける土地ではない。紆余曲折を経て首都圏で唯一、朝鮮民主主義人民共和国の範囲に入った経緯から、開城は南北離散家族の出身地別統計で最多数。なお、漢城の現在の呼び名「ソウル」には2005年、漢字が当てられた。「首爾（ショウアル）」。「首爾（ショウアル）」。「ソウル」で良い。日本統治時代の呼称は「京城」である。

### 4) 朝鮮王朝（李氏朝鮮）の社会

- ① 明の冊封 さくほう をうけ、官僚機構整備。  
仏教を国境とした高麗に対し、朝鮮王朝は、【8: 】を官学とした。これは中国（明）、日本（江戸幕府）でも官学とされた。なお、儒学では不正確。科挙によって儒臣と呼ばれる新興官僚を抜擢し、政界から仏教勢力を排斥した。高麗と同じく、文人、武人の両班 ヤンパン に分かれ田地と徴税権を与えられていた。科挙は高麗でも実施されていた。
- ② 1403年、【9: 】の鑄造を行う鑄字所が設置された。ヨーロッパでは鉛とスズの合金金属活字は、既に13世紀に高麗で実用化されていたが、銅活字を実用化したのは世界初。出版事業も活発だった。朝鮮活字は日本の慶長活字版の基礎となった。
- ③ 第4代【10: 】せいそう 位1418-50 は学者に命じて、庶民に分かりやすく、しかも朝鮮語を正確に表記する民族文字を作らせた。これが、1446年公布の【11: 】である。表音文字（=音標文字）。当初は庶民の使う文字だったが、次第に支配階級や国王も私的文書などに使用するに至り、1894年には甲午改革の一環として正式に公文書に使う文字とされた。現在ではこれを、【12: 】と呼ぶ。「偉大な文字」という意味で、この呼称は（異説もあるが）20世紀に入ってから造られたようである。  
朝鮮民主主義人民共和国ではチョソングルチャ（joseongeul ja）とも呼ばれる。  
朝鮮語という言語を「ハングル」もしくは「ハングル語」と呼ぶことは、少なくとも学術的には誤りである。
- ④ 建国当初は王権が強かったが、政治の実権を握っている文武の両班が土地所有を拡大し、15世紀以降、中央でも激しい党争を起し政治を混乱させた。そこへ、16世紀末には豊臣秀吉の侵略、17世紀には清の侵略を受け、19世紀にはロシアと日本の獲得対象となった。
- ⑤ 16世紀末、【13: 】1537-98 の侵略を撃退した。日本側では、文禄の役 1592-96、慶長の役 1597-98。朝鮮王朝側からは、壬辰倭乱（=文禄の役 1592-96）、丁酉倭乱（=慶長の役 1597-98）。あわせて**壬辰** イムジン・**丁酉** ジョギョ の**倭乱**【14: 】イスンシン りしゅんしん 率いる水軍の活躍※、明の援軍を得て撃退したが、被害は甚大であり、国土は一時、荒廃した。朝鮮王朝は明の朝貢国であり、この侵略は明を中心とする当時の国際秩序に真っ向から挑戦するもので、ここまでやったら明との正式な国交回復は当面は無理である。そうでなくても、倭寇の根拠地とみなされていた（後期倭寇については本当は違う！）ので、海禁の緩和後も中国商人の日本渡航は禁じられていた。  
※【14】が造らせたという**亀甲船** きっこうせん は有名……写真による出題に備え見ておこう。

亀甲船とは、敵兵の乗り移り攻撃を防ぐため漕ぎ手と砲手の頭上を厚板で装甲し、その表面には刃物が植え込んであり、乗り移った瞬間に足に負傷する。側面、正面には砲門多数を設け、日本の船団に大打撃を与えた新兵器。

李氏朝鮮は韓国併合（1910）で消滅するまで存続。朝鮮最後の王朝となる。

- 5) 日本は、室町幕府の第3代将軍【15: 】あしかがよしみつ在職1368年 - 1394年 が、「倭の五王」以来ひさびさに、中国皇帝の冊封を受け、正式の朝貢貿易を行った。これを【16: 】という。正規の貿易船であることを示す割符を勘合と言ったことからこの名がついたが、明は東アジアの50ヶ国程度に、正式の来貢、通交船であることを証明する勘合を与えていた。明は日本(室町幕府)に倭寇の取り締まりを求め、幕府も公船で貿易を行ない、私貿易を禁止すれば、貿易の利得を幕府側で一手に得られると見て、勘合を用いる貿易を押し進めた。江戸幕府の朱印状による朱印船貿易（銀を輸出、生糸を輸入 1635年まで）との混同に注意せよ。

日本は、形式だけとはいえ、中国皇帝の臣下となることを嫌い、遣隋使、遣唐使は朝貢のみで冊封は受けていない。宋・元に対しては朝貢もしていない。鎌倉時代は元寇を被った。冊封をうけるのは「倭の五王」以来である。

足利義満は、明との正式な通交を望み、1374年に遣使したが、明は南朝を日本の唯一の正規な通交相手として認めていた。また、天皇の臣下（天皇の家臣は陪臣であるから）との通交は認めない方針のため、交渉は実らなかった。1380年にも「日本国征夷将軍源義満」名義で交渉を始めようと試みるが、これも天皇の家臣との交渉は受けないと理由と、宛先を丞相にしたという理由で入貢を拒否された。1392年南北朝の内乱を收拾した義満は、1394年に太政大臣を辞し、出家した。これにより義満は臣下ではない自由な立場となった。1401年（応永8年）、「日本国准三后源道義」の名義で博多の商人肥富と僧祖阿を使節として明に派遣する。南朝はすでに没落しており、建文帝は義満を「日本国王」に冊封した（返礼の使者を送るまでに靖難の変が起き、建文帝から永楽帝に皇帝が替わった）。同時に明の大統暦が授与され、国交が正式に樹立された。朝貢形式をとった勘合貿易は1401年から始まり（1404年以降は勘合符を所持した者に限定）、1549年まで続いた。明の要請で倭寇を鎮圧した。

- 6) 大理国がフビライに滅ぼされ(1254)、支配下にあったタイ人が南下して、中部タイに建国したのがスコータイ朝。No.27を参照せよ。アユタヤ朝は、王家を中心として、独占的な貿易を行い、主に中国への米の輸出で国力を伸ばし、日本、琉球などの東アジア国家、東南アジア島嶼部、アラブ・ペルシア方面や西洋とも活発に貿易を行い、莫大な富を蓄え東南アジアで最強の国に成長した。
- 7) 永楽帝 位1402-24 はヴェトナム（大越）にも遠征し、一時（1407～27年）併合した。この支配から独立した【17: 】れいちょう 1428-1527, 1532-1789 は、儒教、科挙、官僚制など中国の制度から学んで強大化し、チャンパーに大打撃を与え、併合した。大越国（1009～1789）は李朝→陳朝→胡朝→黎朝。 No.28参照

## 16世紀の活況の中で！

16世紀、銀のグローバルな流通の中で国際貿易が発展すると、明の厳格な海禁、通交管理体制に真っ向から挑む人々が現れた。

- 1) まだ15世紀中ごろであるが、オイラトの【18: 】はモンゴル高原を統一、強勢を誇った。1449年、土木堡の戦いで、明の第6代皇帝正統帝（英宗）を捕虜にした。これを【19: 】と言う。目的は明が厳しく規制していた交易の拡大であり、正統帝（英宗）は後に送還され、復位して第8代天順帝（位1457-64）となる。戦いの名は「土木堡の戦い」だが「土木堡の変」とは呼ばない。

金が北宋を滅ぼした靖康の変 1126-27、永楽帝が帝位を奪った靖難の変 1399-1402 との混同に注意せよ。

土木の変(1449)以降、守勢に立つ明は「万里の長城」を石造りで修築し、現代のような姿になった。写真・図で確認せよ。テレビ番組で紹介されるのは北京に近い「八達嶺長城はつたつれいちょうじょう」である。石造りの堂々たる長城は甘粛省から総延長6,352km、河北省山海関で海に突き出して終端となっている。なお、この山海関より東を「関東」と言う。だから「関東軍」という。

実際、長城は堅固だった。明の最末期、山海関では後金との間で死闘が繰り返され、清は明の遺臣、呉三桂の手引きでようやく山海関を越え、清の中国支配が始まった。日中戦争中、日本陸軍も簡単には山海関を抜けなかった。「中華帝国」の力を誇示するかのような長城であるが、古代の長城と比べてずっと東にある。

- 2) 韃靼（タタール）はオイラトに圧倒されていたが、15世紀後半、【20: 】 1464-1524 フビライの子孫とされる が即位、オイラトに対抗して内モンゴルを再統一、オイラトも制圧、モンゴル高原の大半を支配下においた。【20】は、1501年には華北に侵入している。この事件には特に歴史的呼称はない。

16世紀には、【20】の孫、【21: 】 1507-82 が華北侵入を繰り返し、交易が認められないので略奪を行った。1542年に山西省に侵攻した際、大量虐殺、略奪を行ったとされる。【21】は1551年には正統ハーンとして即位しており、厳密にはハーンであると思われるが、一般的な教科書、用語集に従いハーンと表記する。【21】は、1550年に北京を包圍した。08R これを庚戌こうじゅうの変という。しかし、全盛期は長くは続かず、1571年に明と和平条約（隆慶封貢／隆慶和議）を締結せざるを得ず、明は【21】を順義王として冊封し、朝貢交易に応じた。しかし、これでもう略奪はできないことになったので配下の人民は実は実不満だったという。

【21】は1578年、ソナムギャムツォと会見してチベット仏教黄帽派に改宗し、【22: 】の称号を奉じた。ソナムギャムツォはダライラマ3世であり、彼の前世者2人もダライラマ1世、2世とされた。オロス部の長、セチェン・ホンタイジとともにモンゴルにチベット仏教を広めた。

## 後期倭寇 16世紀以降、中国東南の沿岸部を中心に再び【23: 】の活動が活発化した。

14世紀の前期倭寇とは異なり、主に【24: 】の集団が倭寇を名乗って、中国沿岸を略奪したもの。民間の交易が認められないので略奪を行ったのである。後期倭寇の略奪は1550年代には最悪の状況となり※、明は1567年、ついに海禁を緩めた。

※たとえば、1555年？王直が朝鮮の海岸を大規模に略奪した。これを「王直の乱」と呼ぶこともある。王直は種子島への鉄砲伝来やザビエル来日にも関与した国際商人で後期倭寇の頭目。明軍の攻撃を避けるため五島を根拠地とし、平戸に居宅を持ち、部下2000人。帰国した際、明朝政府に逮捕され、1559年に処刑された。平戸には交易の橋渡し役として活躍した人物として銅像が建てられているが、中国では罪人扱いされることが多い。